# 幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発 －3－

(1)松尾 砂織, (2)洲濱美由紀, (3)岡 芳香, (3)加藤 秀雄, (3)杉川 千草
(5)朝倉 匡夫, (1)居川あゆ子, (1)桑田 一也, (4)深澤 清治, (4)松浦 伸和
(1)広島大学附属三原中学校, (2)広島大学附属三原幼稚園, (3)広島大学附属三原小学校,
(4)広島大学大学院教育学研究科 (5)神石高原町三和中学校 sorry@hiroshima-u.ac.jp

## Ⅰ はじめに

本研究は，幼小中一貫教育力を基盤とした国際交流学習のためのカリキュラム開発をめざす具体的な取り組みとして，教材・単元開発を目的とした研究である。ここでねらいとするのは，園児・児童・生徒を取り巻く社会のグルーバル化が著しいこの21世紀において，世界の中の日本に生まれた私たちが幼小中段階でどのような国際的コミュニケーション能力を身につけるべきかを考えることである。

## Ⅱ ２年間の経緯

１年次(2003)の研究(1)においては，単元開発において最も大切なことはいかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り，実施するかということであるという前提に立ち，幼小中の各レベルにおいての取り組みを考え，理論の構築と実践的な活動を行った。

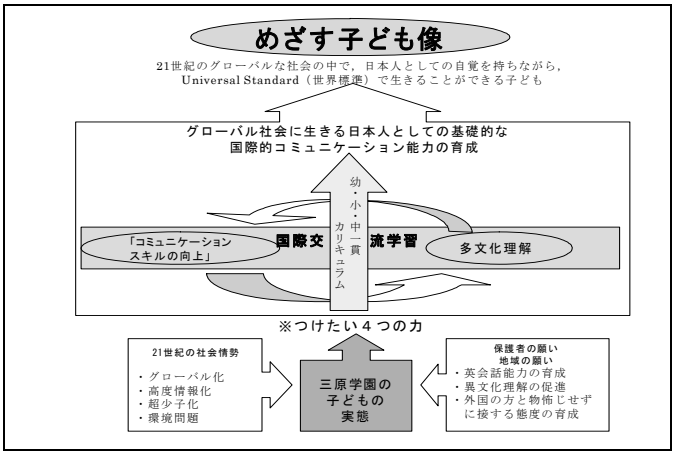
２年次(2004)の研究(2)は，初年度の研究で明らかになった２点を中心的な課題に据えて取り組んだ。１点目は，幼小中に位置づけられた国際交流学習の定着である。そのためには，校種の枠を越えた単元構成と継続的かつ系統的な単元開発が必要となった。２点目は，子どもたちの実態を把握し，どのような力がついたか，どのような変容が見られたかを明らかにする評価方法の開発である。

## Ⅲ 本年度の取り組みと特色

３年次(2005)である本研究(3)は，過去２年間取り組んできた国際交流学習のさらなる定着と，単元レベルでの評価方法のあり方を試みることにした。今年度の国際交流学習は，幼稚園，小学校，中学校とも，広島大学の留学生を主とした直接的な体験活動を仕組むことで，コミュニケーションスキルの向上をねらいとした学習単元の開発を中心的研究課題に据えた。2005年度の実態調査によると，外国の方と交流することに対しては，積極的な様子を見せる子どもがいる一方で，自分の思いを書いたり，話したりすることに苦手意識を持っていることが明らかになった。そこで，直接的な体験活動を仕組むことで，外国人との交流に必要な態度を身につけさせるとともに，体験の中で感じた思いや考えを表現しようとする意識を高めさせる活動を定期的に，かつ継続的に計画することができれば，コミュニケーションスキルを向上させることができるのではないかと考えた。そして，活動を仕組むにあたっては，国際交流学習の中でつけたい４つの力の育成をはかる評価方法についても試行，実施することにした。

## Ⅳ 育成したい力とめざす子どもの姿

国際交流学習開発部会では，国際交流学習を通して育成したい力とめざす子どもの姿（子ども像）を次のように設定している。図－1にその概念図を示す。




図－１

ここで挙げたつけたい４つの力とは次の内容をさす。

①多文化を受け入れ，理解し，それを尊重しようとする態度や能力【多文化理解】
②異なる文化や考え方を持った人たちとの共生を求める態度や能力【共生・交流】
③日本人という個人の立場で自己を理解し，自国での言葉で自己を表現する能力【自己表現力】
④国際社会で，相手の立場を尊重しながら自分の意見を明確に表現するための外国語を使ったコミュニケーション能力【コミュニケーション能力】

以下，留学生との直接的な体験活動を通して，つけたい４つの力の育成をはかった実践例を報告する。

## Ⅴ－①中学校の実践事例の概要

「エスコートプロジェクト in Hiroshima」は，交流学習の中に平和学習の要素を取り入れ，その両方を単元の目標として設定した。そして，国際コミュニケーション学習の仕上げの単元として位置付け，中学校三年生での実施とした。

**【単元について】**

本単元では，平和学習を軸とした留学生との交流学習が位置付いている。学習の過程で，広島平和学習をもとに『広島平和公園ガイドブック』を作成し，実際に広島大学留学生に，英語で平和公園内の慰霊碑や，原爆ドームなどを案内するガイド実習の際に，ガイドブックを使用した。学習のまとめとして，次の３年生に引き継ぐという視点から単元の学習内容の修正を行った。

**【目標】**

・広島平和公園周辺の施設および慰霊碑を留学生にガイドすることで，戦争･平和について考え，積極的にかかわろうとする態度と，積極的にコミュニケーションを図ろう

とする態度を育てる。【表】【交】【コ】

・平和を語る原点だといわれている被爆の事実を知り，戦争の人間破壊の恐ろしさを理解し，私たち自身，平和のために何をすべきなのかを考えさせる。 【表】

**【授業の実際】**

① なぜ学ぶのか‥学習課題と目標の設定(1 時間)

② 何を学ぶのか‥学習の流れの確認と役割分担 (1 時間)

③ どう学ぶのか‥調べ学習とガイドブック作り (4 時間)

④ 平和公園ガイド実習‥（1 日）

⑤ どう学んだのか‥単元の修正

「なぜ学ぶのか」では，単元の概要と，目標を説明した後，課題１として，「ガイド実習で留学生さんに何を伝えたいのか」をクラス全体で考えた。今までの反省から，最初に生徒に学習の意義と価値を理解させておかないとその後の学習に興味がなかなか持てないという傾向があることがはっきりしてきたからだ。生徒たちは，戦争，特に原爆についてまだまだ自分たちは知らないことが多いから，まずは，自分自身が戦争についてよく知り，平和への思いを伝えようと決定した。

伝えたいことがきまった後に，「何を学ぶのか」では，インターネット資料と，図書資料を用い，各自が平和に関する調べ学習を行った。同時に，英語教材『SADAKO』を読むことで，原爆の子の像にまつわるエピソードを学習するとともに，英語表現をガイドブック作りに役立てるようにした。

「どう学ぶのか」で，調べたことを元にガイドブック作りを行った。導入から，ガイドブック完成までの時間が 6 時間しかなくここまでの学習は大変忙しいものとなった。

**アンケート調査 1**

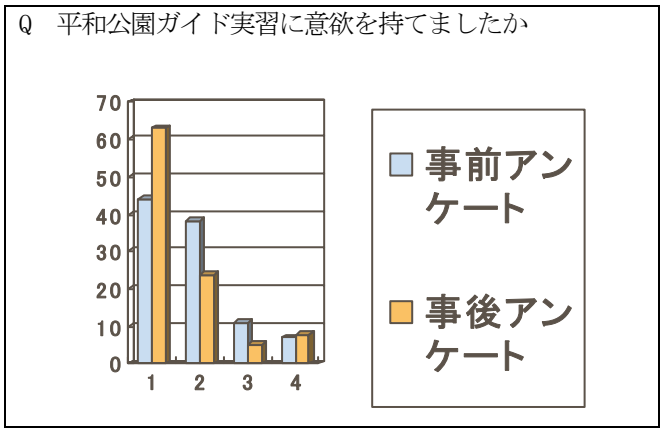
Q 平和公園ガイド実習に意欲を持てましたか

1 大変持てた

2 まあまあ持てた

3 あまり持てない

4 まったく持てない (数字は%)




授業の中でこのグラフを生徒は次のように分析した。

「2 まあまあ持てた」，「3 あまり持てない」が減り，「1 大変持てた」が増えたのは，

→実習前は不安な気持ちもあったが，思ったより，楽しかった。成功感・達成感があった。

→異文化に触れることが出来た。（イスラム教の礼拝）知識が増えた。

→英語での会話が新鮮だった。何気ない会話が通じたことに喜びを感じた。

からである。

**【成果と課題】**

学習を進めて行くにあたっては，目的（目標）・内容・評価を明確にすることが必要で，これらが不明瞭であると，生徒は学習に対する意欲が低下する。又，学習を効果的に進めるためには，課題設定から，情報収集，情報再構成，再発信，までの学習の道筋を身に付け，主体的・創造的に学習する力の育成＝「学び方を学ぶ単元」を効果的に配列することも必要となってくる。これらがよりよく循環することで，生徒たちの学びもより向上することが期待される。

表―1 には単元の評価規準を示す。

**表－１ 単元の評価規準表**

| 評価規準 | 平和公園のガイドプランを作成することを通して，戦争・平和について考え，積極的にかかわろうとする態度と，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることができる。 | | |
|---|---|---|---|
| 評価基準 | A | B | C |
| ○【表】<br>【交】<br>【コ】 | ・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに，ガイド実習で，留学生と積極的にコミュニケーションを図ることができた。 | ・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに，ガイド実習で，留学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとした。 | ・ガイドプラン作成に参加する。ガイド実習で，留学生とコミュニケーションをとろうとする意欲が乏しい。 |

## Ⅳ－②小学校の実践事例の概要

年度当初の調査によると，子どもたちは，「外国のことをいろいろ知りたい」「外国の人とお話をしたい」など国際交流学習に大変意欲的であるが，「自分の考えを話したり書いたりする」「外国の人に手紙を送る」など自分の思いを表現することについては消極的な傾向が見られた。

本年度は，外国の方と直接ふれあう体験など，子どもたちが楽しみながら，自然な状況の中で自分の思いを積極的に表現することができるようにしたいと考えた。また，多文化理解の学習として積み上げていくために，年間を通して７名の留学生に来ていただくようにした。

**【単元について】**

学年：広島大学附属三原小学校４年生　37 名

単元名：「留学生さんとなかよくなろう」

実施期間：平成 17 年７月～平成 18 年１月

本単元は，留学生との交流を通して，いろいろな国の文化に関心を持ち，それらの国々に対する理解を深めたり受け入れたりしようとする気持ちを持たせる学習である。子どもたちは，これまでに年に１回程度外国の方の学校訪問を受けてきているが，その機会を国際交流学習の中にきちんと位置づけることができていなかった。

そこで，本年度は，年間を通して同じメンバーの留学生と交流し，子どもたちに多文化理解やコミュニケーション能力を育んでいこうと考えている。留学生との交流という外国の方と直接ふれ合う体験によって，子どもたちが楽しみながら学習に意欲的に取り組むことを期待している。

**【目標】**

・留学生の国の文化や自分の国の文化との違いを調べることを通して，それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。【多】【交】【共】

・進んで交流の準備をしたり，自分たちの調べたことを相手にしっかりと伝えたりすることができるようにする。【表】

・留学生とのかかわりを通して，お互いの身近な生活について交流し，それらの国や人々と主体的にコミュニケーションすることができるようにする。【コ】

**【授業の実際】**

第１次　留学生さんとなかよくなろう（３時間）

第２次　留学生さんの国の文化について調べてまとめよう（５時間）

第３次　調べたことを発表しよう（２時間）

＜第１次＞

「留学生の自己紹介を聞いたり一緒にゲームをしたりすることを通して，いろいろな国の文化に興味を持ったり積極的にコミュニケーションをとったりする」ことをめあてとして，留学生との交流学習を行い，留学生の母国語で，挨拶や自己紹介をしていただいた。また，民族衣装や民族舞踊を見せていただいたり，母国の文化について紹介していただいたりした。

＜第２次＞

留学生の国の文化について，調べてまとめる学習に取り組み，11 月には，留学生にも参加していただいた。子どもたちは，自分の調べたいことに合わせて，それぞれの留学生のそばに集まり，留学生と直接ふれあう中で，たくさんのことを学ぶことができた。また，留学生の英語混じりの日本語にも，一生懸命に耳を傾け，何度も問い返しながら，コミュニケーションをとろうとしている姿が見られた。12 月には，「留学生といっしょに作ったバングラデシュカレーを，手で食べたり箸で食べたりする活動を通して，いろいろな食文化の違いを体験し，それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つ」ことをめあてとして，留学生の国の食文化を直接体験する活動を行った。子どもたちは，国語で「手で食べる，はしで食べる」（森枝卓士　学校図書四下）という説明文を読み，国による食文化の違いについて学んでいる。そこで，バングラデシュから来られた留学生にカレーの作り方を教えてもらっていっしょに作り，インディカ米と日本米のカレーライスをいろいろな方法で食べてみる活動を行った。

＜第３次＞

留学生を招いて，調べ学習の発表会を開いた。

**【成果と課題】**

12 月に行った年度当初と同じ質問項目での調査によると，「外国のことも自分の国と同じように大切にする必要があると思いますか」「外国に住みたいですか」「外国の人に英語（外国語）でお手紙を書きたいと思いますか」の４項目については，「とても思う」という回答が大きく増えた。留学生との交流や異文化理解の学習を通して，外国の人をより身近に感じることができた成果が伺える。その他の項目については，あまり大きな変化は見られなかった。今後も，留学生や他国の子どもたちとの交流システムを整備し，子どもたちが直接多文化にふれることのできる機会を継続して保障していきたい。

### Ⅳ－③幼稚園の実践事例（３歳児）の概要

幼稚園では,「絵本・音楽」「日本古来の文化と四季に親しめる行事」「外国の人々」「異年齢の友達・高齢者」の四つの活動の視点から国際交流学習のカリキュラムの編成を考える。幼児期には特に身近な人や，文化にふれるという日常の保育全体が,国際的コミュニケーション能力をはぐくむ土台づくりとなっているととらえている。

ここでは四つの活動の視点のうち「外国の人々」との交流を焦点化し，取り組みを紹介する。(表－2 照)

表－2 留学生交流年間計画

| 月 | 内容 | 人数 | 国 |
|---|---|---|---|
| 5月 | ヨモギ摘み<br>外国のビッグブックの読み聞かせ | ECUの学生 | アメリカ |
| 7月 | 七夕祭り（星の話を聞こう） | 5人程度 | いろいろな国 |
| 7月 | お泊り会（年長） | 5人程度 | いろいろな国 |
| 9月 | 一緒に遊ぼう | 5人程度 | いろいろな国 |
| 10月 | お月見コンサート | 5人程度 | いろいろな国 |
| 11月 | 一緒に遊ぼう | 5人程度 | いろいろな国 |
| 12月 | クリスマス会 | 5人程度 | いろいろな国 |
| 1月 | 正月遊び | 5人程度 | いろいろな国 |

３歳児は,園生活の中で保育者を心のよりどころとしながら信頼関係を作り，自分の居場所を見つけ,生活リズムに慣れ,安定感を得て少しずついろいろな人とのかかわりを広げると考える。そのことを踏まえ,まず,保育者自身が留学生と楽しく話をしたり遊んだりし,自然に留学生に親しめる雰囲気をつくり，その雰囲気に子どもたちがふれることで,子どもたちが安心感を持って留学生にかかわることができるのではないかと考える。こうした幼児期の体験が基礎となり,小学校・中学校でのコミュニケーション能力へとつながっていくのではないかと考える。また,保育にあたり,実態や時期に応じて,無理のない形で留学生と一緒に遊び，留学生から簡単な手遊びを教わる場など様々な交流の場を取り入れ,平素より親しんでいる活動を通して,いろいろな人と出会い,親しみをもつきっかけになるように配慮した。１回の交流における留学生の参加人数は３～５人である。

**【保育の実際】**

実施日： 平成 17 年５月～平成 18 年１月（７回）

ねらい:いろいろな国の人と一緒に遊ぶことを通してふれあいを楽しむ。

実施クラス:3歳児

**【エピソード記録】**

**５月 25 日（水）〈イーストキャロライナ州立大学（ECU）の学生による外国のビッグブックの読み聞かせ〉**

優しい笑顔と優しい声で子どもたちに語りかける学生。その雰囲気に安心し,身を乗り出して嬉しそうにニコニコと絵本を見る子どもたち。読み聞かせの間,子どもたちは絵本にじっと見入っていた。終わって,「もう一回読んで～」とリクエストする子どもたちもいた。

**【エピソード記録の考察】**

言葉は分からないはずなのに,何が子どもたちをひきつけるのか。英語だから話の意味が分からないのではなく,絵や学生が話す優しい声のひびきなどの雰囲気が心地よかったと考えられる。言葉が通じないということより,見たい,聞きたい,楽しそう,何かな？といった感覚で多文化にふれているように感じた。

### Ⅴ　領域から新教科国際コミュニケーション科へ

本研究の目的は，国際的コミュニケーション能力の育成である。そのため，今年度より国際コミュニケーション学習は領域から教科へ，そして交流学習とマルチメディア学習を融合させた単元の開発を進めていく。これまでの実践と，融合することによって生み出される新たな観点を模索しながら実践を進めるとともに，評価方法の確立をめざして，今後の研究を推進していこうと考えている。

**〔参考文献〕**


1) 深澤清治， 松尾砂織，岡野佳子，松島英恵，江本繁子，岡芳香，奥井京子，中山貴司，林原慎，居川あゆ子，桑田一也(2003)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅰ),『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第 32 号，pp. 23-31.

2) 深澤清治， 松浦伸和， 松尾砂織， 洲濱美由紀，岡芳香，加藤秀雄，杉川千草，朝倉匡夫，居川あゆ子，桑田一也(2004)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅱ),『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第 33 号，pp. 139-147.

3) 広島大学附属三原学園編著(2005)「21 世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」，pp. 26-69